

横浜市小学校社会科研究会

5 学年部会

研修会記録

第 2 号

令和元年 7月 24日

横浜市小学校教育研究会

会長 榮 秀之

横浜市小学校社会科研究会

会長 新井 篤志

同 学年部長 加藤 沙智子

【提案日時】

7月 3日 (水)

提案 加藤 沙智子先生 (星川小)

【会 場】

横浜市立 丸山台小学校

司会 金澤 範明先生 (瀬戸ヶ谷小)

記録 明石 真実先生 (緑小)

○単元名

「鉄コーティング直播栽培で持続可能な米づくり」

○提案者より

・分析提案では、視点①に重点を置いた。

＜成果＞

・単元の流れを最初に掲示 ⇒ 子どもの言葉に寄り添いつつ、教師自身が単元を見通し、時数をマネジメントするよう意識出来た。

・発問「これからの農業、どうなるんだろう？」 ⇒ 大きな問いの中に、「技術の向上」という明確な視点があったので、子どもはぶれずに考えることができていた。

＜提案＞

①体験を生かしながら、実感を伴って産業への理解を深める授業づくり

②子どもから生まれる問いを起点にして、「わが国」の農業についての「本気の学習問題」を追究していく授業づくり ←発問「これからの農業、どうなるんだろう？」は、Yさんの事例から大きく跳びすぎているか。発問の前の子どもの言葉の中に、高齢者のYさんを見つめたことによる「わが国」の農業の課題が見えてきていたので、そこからつないでいたらどうだったか。

○グループ協議

＜成果＞

・学習課題や単元の流れの掲示 ⇒ 学習の間の充実（自主学习等）／授業の一貫性／予想の充実などにつながり、子どもの主体性を高めていた。

・提案①のように、子どもの経験＋「鉄コーティング」の材のパワーが、深いスパイラルにつながった。

＜今後に生かすために＞

・提案②のように、「Yさん」と「わが国」をリンクさせながら発問し、「わが国」へと焦点を移していくことで、「子どもの思考」＝「教師が目指すゴール」に近付くのでは。

○授業者より

・「本気の学習課題」を考えた本時から、新たな「本気の学習課題」が生まれ、次時がとても盛り上がった。

・給食の米の残量が0になった。

・漁業の学習では「Yさんの水産業バージョンは？」「調べてきたよ！」などの声⇒自己調整力の向上

＜講師の先生より＞

＜菊名小学校校長 野間 義晴 先生＞

・「自分の学校では無理」と思いがちだが、子どもとの単元作りはできる。今回の授業の、自分で調べてきた子ども（C21）のような子どもが自分のクラスにも出てくるような授業づくりが大切。授業記録を読んだり分析したりしていくことで、目の前のいろんな子どもへの自分なりの対応に生かされていく。

・今回の授業のように、子どもたちの変容に合わせて授業の流れを変更することは、「指導と評価の一体化」の上で必要だ。やみくもに子どもの言葉に乗っかるのではなく、「教師の教えたいこと＝子どもの学びたいこと」へと、すり合わせていくことで、自分自身もその後の授業が楽になっていく。

文責 加地 亮祐 (新鶴見 小学校)